

## 信仰の勝利

加藤 享

### 【聖書】 ローマの信徒への手紙3章21～26節

ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。

### 【序】 宗教改革500周年に当たり

マルチン・ルター(1483～1546年)は、神学教師として新約聖書のローマの信徒への手紙、ガラテヤの信徒への手紙を講義しているうちに、自分の**聖書理解**と当時のカトリック**教会の在り方**の食い違いに、深く悩むようになりました。そこで教会がローマの大聖堂改築の資金集めのために**免罪符**発売をしたのをきっかけに、**公開討論会**を呼びかける「**95ヶ条の提言**」をヴィッテンベルク**大学教会の壁**に貼り出しました。1517年10月31日のことです。

それが当時の教会や国の在り方に不満を持っていた多くの人々から**予想を超えた支持**を得ることになり、いわゆる**宗教改革**の大きな波が全ヨーロッパに広まり、その結果、**プロテスタント教会**が各地に誕生したのです。今年の10月31日は**宗教改革500周年**に当たります。そこで今日は、ルターの福音信仰と、私が身近に経験したルターの信仰について、証しさせていただきます。

### 【1】 ルターがもたらした宗教改革

ルターは、大学生時代に**同級生**が試験中に**病気で急死**し、**ショック**を受けました。更に**彼自身**も激しい雷雨の中で**落雷の危険**にさらされ、**死の恐怖**を味わいました。そこで彼は**修道士**になる決心をして**修道院**に入ります。そして約8年の修道生活の間に、自分の**信仰の動機の不純さ**に気付かされていきました。死の恐怖から救われたいために神を信じ、神を愛するようになった——これはひたすら神を愛する愛ではなく、自己の平安のために**神を利用している**ことになるのではないかと気づかされたのです。

そしてこのように**罪をかかえる者が、自分の生活(行為)によって、神から義とされはずがない**。このような自分に救いがあるとすれば、**罪人を無条件で赦して下さる神の愛**しかない。そこでキリストの十字架の福音の内に救いを見出す**福音信仰**に立つことができたのでした。

カトリック教会では、洗礼を受けた後に**罪を犯した時は、罪を悔いて反省し、祭司に告白して赦しを受けること**、また赦しに見合う**償い**をすることによって**赦されると**、考えられていました。ところが当時のローマ教

皇が、聖ピエトロ大聖堂の建築のために、「贖宥状(しょくゆうじょう、いわゆる免罪符)を購入する者は**全ての罪が贖われる**」と布告し、特にドイツの神聖ローマ帝国内では、大々的に販売が行われました。

**贖宥**:贖とは罪を免れること。宥とは許すこと。贖宥状を買うとはすなわち**罪のゆるしを金で買うこと**になります。死んだ人のために買えば、その人も救われる。まるで天国行きの切符です。「贖宥状を購入して、コインが箱にチャリンと音を立てて入ると、靈魂が天国へ飛び上がる」とのうたい文句に、人々は群がって購入したそうです。

その有様を見聞きしたルターは、その**非聖書的な行為**をはっきりと指摘しました。そして彼は、1521年に教会からは**破門**、皇帝からは**追放**されますが、ザクセン侯の好意でヴァルトブルグ城内に置われます。

するとその期間にルターは、**新約聖書をドイツ語に翻訳**しました。そして発明された印刷技術によって広められたので、多くの人々が**自分で聖書を読める**ようになりました。それまでの教会は、**ラテン語訳聖書**を使い、賛美・祈祷も皆**ラテン語**で行われていたそうです。その結果、自分で聖書を読み、自分の言葉で祈れる**自覚的な信仰者**が誕生——これが大きな変化を教会にもたらしたのです。

更にルターは、1520年に「ドイツのキリスト教貴族に与える書」を書いて、キリスト者を**靈的と世俗的**の二つのクラスに分けるカトリック教会を批判し、神の目からは、**キリスト者は全て祭司である(万人祭司)**と主張しました。根拠は「しかし**あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です**」(ペテロの手紙2:9、黙示録5:10)という聖書の言葉です。

主イエスは、ペトロが「**あなたはメシア、生ける神の子です**」と告白した時、「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる」とおっしゃいました。そこで**カトリック教会はこの岩をペテロ個人と取り、「ペトロの後継者であるローマ法王と、法王から任命された聖職者が神とつながり、その聖職者を通して、一般的信徒が神とつながる」と考えました。**

しかしルターの**万人祭司説**を受け継ぐ**プロテスタント教会は**、原文「この岩の上に」の岩は、petros という**個人名**ではなく、petra(岩盤)が用いられていることから、ペトロと同じ**信仰告白**「あなたはメシア、生ける神の子です」をする**信徒すべてが、直接神とつながっていると、受け取ります。**

私たち川越教会も、皆さんお一人お一人が、キリストを救い主と信じる**信仰告白**によって、イエス・キリストに於いてご自身を現してくださっている神さまと、**直接につながって居られる**のですね。牧師を通してつながっているではありません。**万人祭司**——この信仰もとても大切です。

### [3] 信仰によって与えられる義

さて、もう一度振り出しに戻ります。ルターは、**死を恐れる**ことから、神に救いを求め、修道士になりました。父親から厳しくしつけられた彼は、**神に対しても厳しく怖い方**というイメージをずっと抱いていたそうです。その神を愛するようになる——何故？ それは**自分の死の恐れを取り除いて下さる**ように求めて、そのために信じ、愛する——

しかしそれでは、**愛の動機**が自分にあります。神を神として愛するのではなく、**ルター自身のために**神を愛することに外なりません。それが**真実の愛**と言えようか。自己目的のための愛——相手よりも自分が先立っている愛。この**愛の不純さ**に、ルターは、**神に対する罪、自分の信仰の奥底にある罪、不義**に気付かされたのでした。

では神を信じようとする自分の心の奥底にある**不義、罪**から、どうしたら救われるのでしょうか。その時ルターに示された言葉が、今朝の聖書、ロマ3章21節以下でした。「イエス・キリストを信じることにより、**信じる者すべてに与えられる神の義**です。そこには何の差別もありません。人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、**ただキリスト・イエスによる贖いの業**を通して、**神の恵み**により無償で**義とされる**のです。」

私たちは皆、それぞれ罪を犯して来ました。神の栄光を受けられなくなっています。ルターばかりではありません。しかし、キリスト・イエスによる**贖いの業**を通して、神の恵みにより**無償で義とされている**のです。「ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされる」ことを**信じて受け入れる**ことです。

**義**とは、罪のない**正しさ、救い、赦し**という意味が込められた言葉です。その義は、私たちが懸命に精進努力して**獲得するもの**ではなくて、恵みの神が、さあ受け取りなさいと、キリストの十字架の恵みによって、**既に与えて下さっている**——それに気付いて、感謝して**受け取る恵み。受け身の義**なのです。私たちが懸命に捕えようとする義ではないのです。

ルターはこう語っています。「**聖書の顔が変わった**」「**神の義**を私はこれまで、深く憎んできた。それだけに、今は、いよいよ愛すべきもの、甘いものとなった。」「ロマ1:17(福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで、**信仰を通して実現される**のです。正しい者は**信仰によって生きる**と書いてあるとおりです)は、私にとって天国への門となった」「**神の義**——これは実に愛に満ちた素晴らしい言葉である。私は神の義に喜びを見つけた」

聖書の顔が変わった——何という素晴らしい言葉でしょうか。私たちもそのような喜びを持ちたいものです。

#### [4] 賛美と祈りの勝利

最後に、私自身が**身近に学んだルターの信仰**の素晴らしさを証させていただきます。私が札幌教会の牧師時代のことです。札幌教会が生み出した平岸教会が、新しい**教会堂建築**に際して牧師の未熟で軽率な行動から、建物が**悪徳業者**に介入される破目になり、1988年に牧師が辞任する危機に陥りました。信者さんたちから相談を受けた私は、後任牧師としてどなたにお願いしたら良いか、一所懸命に祈りました。そして示されたのが**林田金弥先生**でした。平岸教会と相談して、先生に出馬をお願いしました。

しかし、良い返事がいただけません。私は**横浜のお宅**に伺い、直接に懇請しました。先生はその前々年に奥さんを亡くされていました。**お子さんたちは寒い北海道に単身で出かけるなんてとんでもないと、強く反対**しているそうです。林田先生もお困りの様子でした。しかし若い牧師の未熟さによってもたらされた牧

師に対する教会の不信感を癒すには、林田先生を措いて他に見出せません。私はもう一度札幌から横浜に出向いて懇請しました。すると1989年6月にとうとう平岸に来て下さったのです。

「先生、お子さん方が承諾して下さったのですか？」「いや、暑い夏だけ避暑がてら行ってくると言って、出てきました。まあ来てしまえばこっちのものです」。穏やかにおっしゃった言葉を、今も忘れません。79才のお年でした。

平岸教会が直面している危機を、林田先生は神の救いの業を破壊しようとする悪魔(サタン)の攻撃と受け取り、賛美と祈りで撃退しようと決意されました。毎日正午に礼拝堂の二重窓をみな締め切って、一人で大声で讃美歌538を歌って、祈りの叫びを続けられました。1年3ヶ月続けましたが何の成果もないのみか、悪徳業者は教会を競売にするから立ち退けと、暴力団を連れて脅かすようになりました。教会員の一人が「万一怪我をされてはいけないから一時的に自分の家に夜だけ寝泊りして下さい」と要請し4ヶ月間、手稲から平岸まで通勤されたほどでした。

しかし、悪魔は最大の暴れ方を始めました。「教会を競売にするなど出来るものなのか」と弁護士に聞いたら「法律上は出来ないが、暴力的にやった例がある」と言う答。すると先生に御言葉が与えられました。「悪魔に立向かいなさい。そうすれば彼らはあなた方から逃げ去るであろう」(ヤコブ1:7)。そこで先生は、讃美歌538番の4節「わが命も宝(教会堂)も取らばとりね、神の国はなお我れにあり」と決心を新たにしてい、歌い、祈り続けたのでした。

すると事態が一挙に解決したのです。すなわち裁判所によって和解に導かれ、相手側が教会には何の要求もしないと、教会員全員の前で確言したのです。時に1993年、先生が赴任して4年後のことでした。

### 【結】 信仰の遺産を次世代に

讃美歌538はルターの作詞・作曲の歌です。彼はウォルムスの国会に呼び出された時、「この町の屋根瓦ほど悪魔が待ち構えていても、我は行く」と決意し、この讃美歌を歌いつつ出かけていったそうです。ルターはこれを軍歌として歌い続けて、宗教改革の偉業をなし遂げました。

林田先生の4年間の賛美と祈りの戦いも、まさに悪魔との激しい肉弾戦でした。そして林田先生も、その戦いを勝ち抜いて、遂に勝利されました。私はその壮絶な戦いを身近に示されて、ただただ敬服し、祈り続けました。そして、マルチン・ルターの宗教改革の戦いの偉大さを、目の当たりに見る思いにさせられ、ルターへの敬意の念を深めました。

私たちはこれからルターが歌い続けた軍歌を歌います。歌詞の一語一語を噛みしめながら、歌いましょう。そして宗教改革が遺してくれた宝を心に留めて、感謝を新たにいたしましょう。引き続き守る主の晩餐式のパンと杯を頂きながら、御自分の命をお与え下さった十字架のイエス・キリストの恵みに、感謝を新たにいたしましょう。そして川越教会での信仰生活を感謝しつつ送り、次の世代に受け継いでいただきましょう。

祈ります:主よ、今日もこのように礼拝を守ることが出来て、心から感謝します。今日は、あなたがマルチン・ルターを用いてお示し下さった福音信仰の豊かさの一端を学びました。また、ルターが遺した賛美歌を歌いつつ祈りをもって小さな教会を守った先輩牧師の戦いを思い起こしました。感謝いたします。私たちもまた、礼拝を守りつつ、信仰を深め、次の世代に信仰の喜びと感謝とを受け継いでいただけるように、お導き下さい。主よ、殺し合う戦争を止めさせてください。与えられた命を何よりも大切にする心をお与え下さい。救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。 アーメン